【　H28　９月 20/21 日(火・水)　伊江村立西小学校　全学年】

リフレクションシート№170

伊江村立西小学校・西幼稚園訪問

本部港からフェリーで 20 分、台風の余韻残る海をわたる。わたしにとって初めての伊江村立小学校の訪問である。伊江村には小学校が２校、中学校が１校あり、今回の訪問は明日の伊江中学校の訪問を兼ねての１泊２日の訪問計画である。村内３つの学校が近年すべて新築に建て替えられた。西小学校や伊江中学校とも空調設備が整い児童や生徒、先生方の快適な学校生活と学びが保障された手厚い教育行政の配慮を感じる。西小学校は、今年度の４月から赴任された多賀校長先生が前任校（那覇市宇栄原小学校）での実践を踏まえ、また新たな「教師たちの挑戦」への出港である。

整然とした校内や廊下を歩く、校庭や廊下にゴミが見あたらない。子ども達の穏やかな声と先生方の慎ましい会釈を受けながら幼稚園を含めた全教室を拝見させてもらった。「静然とした『学び』は整然とした環境でしか成立しない」玄関入り口の靴箱をみて私の期待も高まる。

［幼稚園］

天使の笑顔である。子ども達は創作することが大好き、しかも、友達といっしょであることも安心する。モノを創りながら「学び」、対話しながら「学び」、ケンカしながら「学び」、仲直りの方法を「学び」、仲間の中で自分が自分として生きるための「生き方」を学ぶ。

絵を描く、モノを創る、音楽を聴く、本を読む、いずれも「アート」の領域である。つまり作品を媒体として何を学ぶかが大切になってくる。確かに作品を創作する行為によって手先の器用さという技能が習得くされることは大切であるが、一番大切にしたいのは、作品を各々がどう感じるか「感性」を学び合いたい。難しく考えるのではなく、音楽を聴いて勝手に踊ったり（身体表現）、絵や作品を創りながら対話するだけで十分である。教師の役割は、さまざまな作品や対話の機会をコーディネートするファシリテータを担うことである。

学校は様々な個性を持った子ども達が共生する社会である。「学校に特別な教育はない」大阪市青空小学校の元校長木村泰子先生は言う。子ども達の様々な状況を個性として受け止めて、その子と関わっていくことを大切にしたい。この子達の柔らかな表情は、間違いなく教師たちの日常の関わり方が映し出された鏡である。

［お誕生日会］　21 日、中学校の授業視察を終えて船の出港までの時間を再び、西小で日常を参観させてもらった。幼稚園で月１回のお誕生日会が開かれていた。司会も園児がやるお誕生日対象の園児の保護者も招かれていた。実にほのぼの和気あいあいである。左の２枚の写真、これが教師の「見守る」「寄り添う」である。園児が安心してみんなの前に立つことができる。安心して躓くこと、安心して間違えることができる。右の３枚の写真は、保護者といっしょに園児たちがお誕生日の歌を歌いながら楽しそうに踊っているところである。お父さんの動きがぎこちないが、確かに頬は緩んでいる。教師も園児も保護者もみんなが「楽しい・うれしい」を共有している瞬間である。上智大学の奈須正祐教授は、学校教育が「資質・能力」の育成に重心が変化していく。つまり非認知的能力（人間性・情意）の育成が大切となってくる。これを踏まえ「幼稚園時代に自分に自信をもって培った力を小学校教育につなげることが大切である。」と提言する。左写真、何も教えない「ただ、子どもの言い分を聴くだけ」の園長先生である。子ども達は活動や遊びといった行為の中で他者との関係づくりを構築させているのです。「自分の生き方」を模索しているのです。フランスの教育学者の言葉『私の人生の生きる術は、すべて幼稚園の砂場で身につけた。』

［1 年］

「低学年は難しい」学び合う授業づくりに真剣に邁進する教師と、研究者たちが異口同音に語る。大学においても、低学年の授業にかかわらず、具体的な授業の実践は、教育実習という短期間な経験しかできないのが日本の大学の教育システムである。つまり先生方の授業づくりもそのほとんどが教師の経験値で実践されていくことにならざるおえない。写真は典型的な問題解決型の授業である。教師に与えられた課題をペアといっしょに考えて、「自分の考え方」を黒板に記す（写真左）。次に「私の考え方（解答への筋道）」を教室の仲間に伝える（写真中）。そして、仲間の考え方を参考にしながら新たな課題で習得した知識を活用する（写真右、机の縦と横の長さを比べる）。子ども達は鉛筆や様々な道具を使って長さを比べている（ペア活動）。さて、ここからが低学年はいっきに難しくなる。やったことの説明、分かったことの説明、感想など、あまり言葉を持ちえない子ども達にとって「伝える」行為自体が低学年の高い壁になる。

「これでいいのかな～？」、「もっとちゃんとさせてあげたい」。まじめな教師ほど「ちゃんと」にこだわり自分を追いつめてしまう。教職という責務とこの子達を育てなければという使命感が「私の不安」を増幅させてしまう。「無理しないで、『ちゃんと』にこだわるな、まじめすぎるのよ。」いい加減なように聞こえるかもしれないが『割り切って』向かい合う覚悟も必要なのです。それは不真面目や不謹慎とはニュアンスが違います。自分や目の前の子ども達のありのままを受け入れていこう、これまでの自分とは違う視点や姿勢で子ども達と関わっていこうという「新な自分改革への挑戦へ」踏み出してみることを意味するのです。

右の写真、すてきですねクリの絵とお互いの気づきや感想を伝え合っているところです。前へ出ての発表は苦手だけど、グループやペアでは自分の言葉を使って自分の考えを伝える（対話的コミュニケーション）ことができるから安心できますね。ほんとに楽しそうに語っていました。ちょっと子ども達の声が大きいのが気になったので少しだけアドバイス。

［子ども達の声が大きくなる要因］

① そもそも教師の声が大きすぎる。→子どもがまねる。

② 言葉が重なり合う。→ 伝えることに競争してしまう。相手が話している途中で自分の意見を伝えようと割り込み、伝えたいがために相手より大きな声を出してしまう。それに対してさらに大きな声で対応しようとするため、教室全体のボリュームが大きくなりテンションが上がってしまう。この教室では②「言葉が重なり合う」が大きな要因となっているのではないでしょうか。・・・ではどうするか？（以下挑戦してみてください）

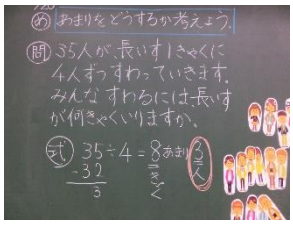
☆1「お話のきき方」・・・一人ひとりの話（考えや意見）を、一人ひとりみんなできき合うことを約束する。
☆2 教師が「聴き方」のお手本を示す。・・・一人ひとりの話しを必ず聴いてあげる。
☆3 言葉が重ならないようにする・・・待たせる→「ちょっと待って,次、お話しさせるからね」
☆4 聴いていない時は、話さない。友達の話もストップさせる。
☆5 「話し方よりも、聴き方を大切にする教室」をみんなでつくる。（教師だけではできない）

［2 年］ 算数：「ふえた数と、へった数をまとめて考えて答えをもとめよう。」

こちらも、問題解決学習のスタイルを基盤とした。学び合いの授業である。解答の式を図式化したり、言葉で説明する。

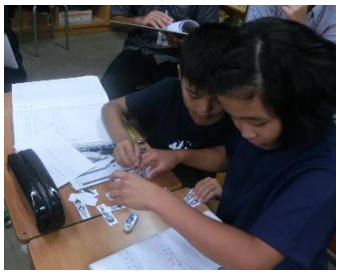
右の写真、子ども達がゆったりと「聴き合っている」落ち着いて柔らかい雰囲気がある。学びは「分からない」や「なぜ」「どうして」の中に学びのネタがある。分からないことを躊躇しないで仲間に訊くことで学びは促進する。仲間は絶対に仲間を見捨てない、訊かれた仲間は、自分の知っていることや、気づきを惜しみなく友達の分かる言葉で必死に伝える。県の授業づくりサポートガイドに、「支持的風土づくり」と記されている。まさに仲間は仲間が支えるのである。教師は学びのネタやきっかけをコーディネートし、学びを促進させたり、一人残らずの子どもの参加を見守るファシリテータの役割を担うのである。授業の後半に、「ジャンプ課題」が下ろされた。子どもの中から「よ～し」「やった～」等の声が聞こえた。教師が日常から実践しいていることがうれしい。ジャンプの課題は、難しい問題でないといけない、「できそうでだれもできない」くらいのレベルがいい。子ども達にとって探求の価値が大きくなり、難しいのでみんなでつながり、聴き合うことが必然となるくらいの課題がベストである。授業終了のチャイムが鳴った、教師が「答えどうしますか？先生が教えますか」と確認した、子ども達は皆「いやだ～」、自分たちで解決したいのです。これを学習意欲というのです。

［3 年］　焦点授業　　算数：あまりのあるわり算



学びの共同体の学校改革を支える３つの哲学がある。一つに「公共の哲学」がある。学校は公共の空間であり、内にも外にも開かれていなければならない。学校改革の第一歩は教室を開くことにある。学習院大学教授佐藤学先生は、「学校を改革する」著書の中で、私は、どんなに優れた実践を行っている教師であっても、１年に１度も同僚に教室を公開しない教師を公立学校の教師として認めない。同僚に教室を開かない教師は、子どもを私物化し、教室を私物化し、学校を私物化し、教職という仕事を私物化しているからである。　　（「学校を改革する」岩波ブックレット№842　2012.7.5）

本日、同僚に互いの学びの空間として教室を提供してくれたＴ先生には、敬意と感謝の念を忘れないでほしい。教師が互いの専門性を高めるためには実践事例（ケーススタディ）から学ぶことが１番である。教師の言葉、タイミング、きく、つなぐ、もどす、教師と子ども関係、子ども同士の関係等、授業進行の空気に触れながら子どもの言葉や、表情や仕草などから授業を観察する意義は大きい。



2020 年新学習指導要領では、授業づくりの方向性として深い学びの過程の実現、他者との協働（協同グループやペア活動）、粘り強く主体的な学びの過程の実現と提言された。西小学校の先生方のベクトルが同一方向に向かっていることに安心する。新指導要領では授業改善の目指す方向としてアクティブラーニングが文科省から一方的に下ろされてくる。現職の先生方にとってはまさに「教えられていない」、「分からない」テーマになる。しかし、このアクティブラーニングこそ「教えられていない」、「分からない」課題やテーマ、ないモノを創りだしていく、『解決に向かう意思や力』という資質の育成と「学びの力」を身につけさせることが目標となるのです。今年８月、本土のある私塾が教職員向け「アクティブラーニング」の研修会を開催した募集定員はすぐに満たされ研修会に参加した先生方の声がラジオで放送されていた。2020 年に向けてすでに個人で動きだした先生方がいるのです。・・・アクティブラーニングにおいて、解決に向かう意思や力が一番最初に試されているのが全国の教師達であることを認識したい。

［バロメータ］

すべての教師、すべての子ども達、一人残らずすべての人々の力で実践されるのが「学校改革」である。

写真左、教師の寄り添いが周囲の子ども達に与える影響は計り知れない。２枚目の写真、「先生だって一生懸命やっている、だから私たちも支えるの。」完全に１枚目の教師の写真の模倣である。教師の姿勢が子ども達を動かしているのです。学校改革は子どもの力を信じて、子どもの力を借りないと絶対に達成できないのです。「支え合う子ども達の力」を信じ、互いの信頼感ですべての子ども達に居心地のいい学校が創られていくのです。

校長先生に言い寄る２名もまた同じく、すべての先生方と仲間に支えられなければならないのです。この３名の表情が西小学校のバロメータとして貴重な存在であることをすべての教師で認識したい。

『アクティブラーニングのイメージ』

文部科学省初等中等教育局視学官　田村学

ⅰ　習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭においた深い学びの過程が実現できているか。

ⅱ　他者との協働（協同）や外界との相互的作用を通じて、自らの考えを深める、対話的な学びの過程が実現できているか。

ⅲ　子ども達が見通しをもって粘り強く取り組み、自らの学習活動をふり返って次につなげる。主体的な学びの過程が実現できているか。

西小学校、西幼稚園の皆さんありがとうございました。素敵な学校、素敵な先生方、そして何よりも今回癒されたのはやはり、素朴な子ども達の互いに支え合う姿でした。Ｔ先生素敵な授業ありがとうございました。子ども達は先生の姿からほんとに多くを学んでいるなと確信しました。　　国頭学びの会ゆい